

志と強い意志

園長 児嶋 草次郎

一つの決断のもとに、私たちは、3月31日（火）から、4月2日（木）にかけて、四国高知県桂浜の坂本龍馬銅像を見に行き来しました。毎年我が園恒例の「高校生自覚旅行」です。今春入学する4名を含めて高校生12名、職員は私を含めて6名、総勢18名マイクロバスを借りきっての研修旅行です。コロナウィルス感染症が徐々に各地に拡散している最中ではありましたが、四国はまだそれほど流行ってはおらず、最大級の注意を払えば大丈夫と考えました。

この時期、そこまでして子供たちに坂本龍馬から学んでほしいものとは何か。世のため人のために生きるという志と、どんな障壁にもめげず前進していくという強い意志です。人生は出会いでもあり、坂本龍馬という存在を知ると知らないのでは、その生き方は随分違って来ます。高校3年間のうち一度は、あの巨大な立像を見上げ、その眼下に広がる荒々しい太平洋を見渡してほしい。それが私の強い願いです。今回行かなかったら彼を知らないままに社会人に自立してしまう児が出ることとなります。3年間で3コースあり、あとの2コースは、岡山孤児院発祥の地（岡山）を訪ねること、吉田松陰の松下村塾を訪ねること、どこも欠かすことはできません。

少々のリスクを冒してでも訪ねることに価値がある、そう判断しました。そのため、宿は他の客のいない民宿とすること、車を出るときは必ずマスクをすること、車に乗る時には必ず手を消毒すること等の対策を講じました。もちろん前回コースに入れた松山城や道後温泉は、人が多いと思われるので除外しました。

3月31日（火）、朝5時34分、石井記念友愛園を出発。出発にあたって、私は子供たちに『泥の中のスズメ貝のようにどんなに泥をかぶっても私は前進していく』というようなことを坂本龍馬は言っていて、その言葉を食堂の壁にはってあるけど、龍馬は日本の社会の未来のために危険をかえりみず、命を懸けて努力し続けた。そういう生き方を、みんながリーダーとして学んでほしいから、今回リスクを冒して自覚旅行に行くことにした。』と話しました。

高鍋ICに乗った頃には夜も明けて来て、大分の臼杵からカーフェリーに乗るまでの約3時間、車はひたすら北上しました。途中のコンビニでおにぎりやパンを買ったものを朝食とし、右に太平洋左に湧きたつように萌え始めた山々を見つめながら時をすごします。今にも雨が降り始めそうな天気であり、山々には、湯気のような靄（もや）が立ちこめていました。

朝が早かったので子供たちは再び眠りに入り、私は目を右にやったり左にやったりしながら、色んな事を考えました。毎日がバタバタと過ぎており、こうしてぼんやりと自然を見つめながら考える余裕はそうありませんでした。

昨日（3月30日）4名のメンバーの先生方に提案の手紙を発信しました。メンバーというのは、「子供の未来を守る会」の叶原土筆氏、潮谷愛一氏、藤野興一氏、菊池義昭氏の4人の先生方です。昨年秋から始めた「家庭に恵まれない子ども達の生活の場を取り上げないで！」と題する署名活動では、31,601名の署名が集まり、この3月末には厚労大臣の所に持って行く予定でした。ところが

コロナウイルス感染症の蔓延のため、とても対応していただけるような状況ではなくなり、今後の「子供の未来を守る会」活動のあり方について他の4名の先生方に活動の延長を提案させていただいたのです。署名活動を再開すること、そして、一応7月頃に大臣の所へ持って行く予定とすること。もしかしたら、コロナの終息が前提ですからもっと先に延びる可能性もあります。

2017年8月に出された「新しい社会的養育ビジョン」に基づく、都道府県版「社会的養育推進計画」は、この4月よりいよいよスタートします。里親推進には大賛成だけど、それは施設否定の上に組み立てられるのではなく、施設との共生の中で、いやむしろ施設による支援を基盤とする上に構築されていくものでなければならない。「新しい社会的養育ビジョン」の中の施設への「乳幼児の措置停止」や「滞在期間の制限」等が地方行政の原理原則として徹底されるようになれば、社会的養護の子供たちの居場所はどんどん制限されていく。そうさせないための戦いは、むしろ今から始まると覚悟しておかねばならない。5年後10年後、子供たちをアメリカ等のように漂流させるような社会的養護・養育の世界を作り出すようなことがあってはいけません。

私は、この旅行に2種類の新聞の切り抜きを持参していました。その記事についても考えました。

3月20日、小学年生の栗原心愛さん(10歳)の虐待死事件裁判の判決が下されたことを伝える記事。傷害致死罪などに問われた父親の判決は、懲役16年でした。この事件で私たち児童福祉関係者が一番反省すべきは、児童相談所が一時保護しておきながら父親の圧力に屈して、彼女を自宅に帰してしまったということ。虐待が急増している社会状況の中で今後、児相や施設への一時保護はますます増えていく(乳幼児の一時保護先はほとんど施設です)と予想できます。そういう中で施設否定の価値観が地方行政の中にも浸透していけば、「施設よりは、少々問題があっても家庭の方がマシ」という考えのもと、問題未解決のまま家庭復帰させるケースも増えるでしょう。そうなれば、第2、第3の心愛さんを生み出してしまいます。

大分県臼杵港から宇和島運輸の「あけぼの丸」に乗船したのは8時35分でした。約2時間半の船旅になります。その後高速のパーキングエリアでも感じたことですが、コロナの影響で自家用車は確かに少なくなっていますが、大型のトラック等は毎回来る時と変わらず、駐車スペースを満たしていました。何があろうとも私たちの食・生活物質の物流を支えているトラックの運転手の皆様の活躍に感謝しなければならないと改めて思いました。

船内では、私は子供たちから離れて一人また考えにふけりました。デッキにも出てみましたが、小雨が吹きつけて寒く、とても遠景を楽しめるような雰囲気ではありませんでした。もう一枚の新聞の切り抜き。忌まわしい相模原市やまゆり園事件です。2016年知的障害者施設「津久井やまゆり園」において入所者19人を殺害(職員二人を含む26人重軽傷)した、元施設職員植松聖被告(30歳)に、3月16日、死刑判決が下されたのです。

被告は小学生の時に作文に「障害者はいらない」と書いたとか。そして大学生になると、入れ墨を入れ麻薬に手を出すようになったとか。そのような男がなぜ自宅近くにあったとはいえ、障害者施設で働き始めたのかはなぞですが、我々福祉現場の人間が一番考えねばならないことは、彼を職員として受け入れて、「障害者はいらない」とする彼の価値観を変えることができなかったということでしょう。彼の犯行を一方的に断罪する評論家的とらえ方については、私は違和感を感じます。あのドイツのナチスの行動を熱狂的に受け入れたドイツ国民の存在を考えると、私たち一人ひとりの心の中にも悪魔的な感性はあるとまず認めざるを得ません。人間は皆、内なる悪魔(偏見)と戦っているわけです。そのことを教えられなかった福祉現場であったことを、私たちは反省しなければなりません。まず大事なものは自らを律しようとする「理念」であり、キャリアアップやマニュアルの研修は二の次三の次の課題です。なにごともしきれいごとですませようとする福祉現場に疑

念を抱かれているからこそ、亡くなった方々の親御さんは、名前をあかそうとされなかったのではないかとも思う。

愛媛県八幡浜港に着いたのは11時5分頃でした。友愛園のソメイヨシノ桜がまだ2、3分咲だったのに、道路沿いの桜の中には満開のものがあります。山桜も満開。コブシやレンゲツツジも元気に咲いています。残念なのは曇天で霧雨が降っていること。松山自動車道にのり山を抜け、左手遠くに瀬戸内海をながめながら、私たちは、高校生女子の出す坂本龍馬クイズに興じました。途中伊予灘SAで昼食を取り、高知自動車道に入って四国を縦断、3時頃に目的地桂浜の県立坂本龍馬記念館に到着。

建物は増築されていて入口も変わっていました。「坂本龍馬(1835年～1867年)は、土佐に生まれ、新しい日本を作るために奔走した人物です。自らが目指した新しい国の姿を目にすることなく生涯を終えた竜馬は、時代を越え、今も多くの人に愛されています。」とパンフレットには説明してありました。私たちはここで1時間ほど、学びまた楽しむことができました。他にお客さんはいましたが、私たちはしっかりマスクでガードしコロナから身を守りました。

新館の展示室に龍馬の手紙が色々と並べてありましたので、興味深く読むことができたことが今回の収穫です。館内で販売されていた「龍馬書簡集」(高知県立坂本龍馬記念館発行)も求めることができました。目に留まった言葉を2、3ここに紹介させていただきます。

「国のため天下のためちからおつくしおり申候。」

脱藩後勝海舟の弟子となり、海軍の事を学んでいる頃、姉乙女に出した手紙(1863年3月20日)です。志がしっかりしています。

「日本を今一度せんたくいたし申候事」

「どろの中のすずめがいのよふに、常につちをはなのさきえつけ、すなをあたまへかぶりおり申候。」

勝海舟の弟子として視野を広め実力をつけ、福井で横井小楠等から日本の未来についての話も聞き、自信をつけた頃の、やはり姉あての手紙(1863年6月29日)。泥の中のすずめ貝のように、どんなに泥をかぶっても前進するぞという龍馬の意気込みが私は好きです。

「社会の役に立ちたい」という若者の同じ思いでも、一方は龍馬のように崇高なものもあれば、「やまゆり園事件」の犯人のように愚劣なものもある。何がその道を分けてしまうのか。やはり少年期の教育しかない。人間は犬や猫のようにすべてをDNAに組みこまれ本能のままに生きているわけではない。しつけや教育によって天と地ほどの差が出てしまう。2歳頃から18歳頃まで親に代ってしつけ・教育を託されている我々の責任は非常に重いと改めて思います。

この日の宿屋は「民宿高知屋」でした。宿屋の正面がちょうど四国霊場八十八ヶ所の三十三番霊所「高福山霊隠寺」でした。私は一休みした後、夕食前に一人お参りをしました。

4月1日(水)8時に出発して、まず訪れるべきは、桂浜龍頭岬に立つ龍馬銅像の所。ところが昨日の霧雨は本降りとなっており、昨日のうちにお参りすべきだったと後悔しました。高さは台座も含めて13.4mと圧倒される大きさです。驚くべきは、昭和3年に高知県の青年たちが募金活動をして資金を集め建立したということ。彼らの熱情を見習うべきです。浜なども散策したかったのですが、海も荒れて寒かったので、記念写真を撮るとマイクロバスにもどりました。その後私たちは、高知城を追手門の所から見上げ、「龍馬の生まれたまち記念館」にも立ち寄りました。龍馬が商人の町(上町)で郷士(下級武士)の子として生まれ育ったということを知るためには、ここはおさえておかねばならない所です。道路のまん中を流れる水路だけが当時の名残を残しています。子ども達は、龍馬関連のみやげをそれぞれに買っていました。

今回の研修旅行の目的をほぼ達すると、私たちは高知を出て、新居浜の近くの別子銅山跡と今治市大島にある「村上水軍博物館」に向かいました。この2ヶ所については、今回初めてコースに入れてみました。

明治43年頃から、石井十次は度々住友本社（当時大阪）に総理事（番頭社長代行のような立場）の鈴木馬左也を訪ねています。もちろん支援要請のためですが、この鈴木馬左也は高鍋出身であり、石井十次とは旧知の仲です。

別子銅山は江戸時代から住友家が経営し、明治時代になると「殖産興業」という国策にも乗り、その技術も近代化、日本では足尾鉾山に次いで国内2番目の巨大鉾山として天下に名を轟かせたとか。実は石井十次の友人であった柿原正一（まさかず 柿原政一郎の父）がここで一時期働いていたのです。このあたり人間関係に最近興味を持ち始めています。残念ながらその記念館はコロナの関係で閉館中で、また現地は大雨、場所を確認するだけに終わりました。

次は「村上水軍博物館」です。石井十次は、最初の頃、今の日向市の美々津から船で岡山に出ています。岡山孤児院が始まってからも交通手段はほぼ船です。子供たちも岡山から船で移送しました。昔、瀬戸内海のある所で海を見た時、眠ったように静かで、生命が生まれた所はこのような海の底ではないかと感じたことがあるのですが、「村上海賊の娘」（和田竜）を読んでイメージが全く変わってしまったのです。壇ノ浦でみたような荒々しい水流が瀬戸内海に散らばる島々の周辺では見られる、そのことを確認したかったのです。その激流を制することができたからこそ、海賊は活躍できたわけです。岡山孤児院時代はすでに海賊は存在しないのですが、この博物館を訪ねることで子供たちの海上輸送がどのようなものであったかがある程度イメージできると考えました。

私たち素人にとって、「村上水軍博物館」の資料は充分で、その海の恐さについても映像で学ぶことができました。3年後、今の高校生メンバーと入れ代わった時には、石井十次とつながるように整理しておきたいと思います。

雨が降っていて実際の海がじっくり見れなかったのは残念ですが、私たちは2日目の宿、内子のペンションに向けて出発しました。

最後に、帰園後子供たちの書いた感想文の一部を紹介させていただきます。

龍馬は、一生を終えるまでに、倒幕に力を尽くしました。簡単ではなかったと思います。成功させたのは、相手の話しや意見を聞いて、良い点を吸収していく柔軟な考えを持っていて、新しい時代のビジョンを持っていたからだと思います。

私は、今年から三友館の館長をすることになりました。龍馬が倒幕を成功させたように、周りの人の意見を聞き、みんなの理想とする「三友館」を作っていこうと思います。 高2 S男

「坂本龍馬から学び、自分の力として身につけたいと思ったことが二つある。一つ目は『立場の違う人の言うこともしっかり聞き、良い点を吸収する柔軟力』だ。この柔軟さからたくさんの事を成し遂げられたと学び、私も身に付け、何事にも前向きに捉え、視野を広くしていこうと思う。二つ目は『優れた人脈を幅広く持つ』ことだ。

この二つの力を身に付けたい。まずリーダーという自覚をもって下級生の模範となる行動をし、あたり前のことを完璧に成し遂げ、これらの力を身に付けていこうと思う。」 高3 S子

S男の友愛園での生活は6年、S子の友愛園生活は14年です。生活習慣もここで年令相応に身につけ、考え方もしっかりして来ています。こうして旅行教育で視野を広げ社会に通用する価値観を身に付けていってくれたらうれしく思います。

虐待死で亡くなった心愛さんが、例え亡くならなかったとしても、あの家庭で健全に育ったでしょうか。虐待を加える親御さんの中には、独特の価値観を持つ人もいます。価値観は簡単に変えら

れるものでもなく、そういう家庭の子供さんは、施設で親御さんと距離をとりながら生活した方が、その最善の利益は保障できるのではないかと思ったりもしています。

4月2日（木）夕方4時半頃、私たちは無事に友愛園に帰りました。その後、コロナ感染症は、ますます拡大して来ています。私たちは子供たちを守るために気をひきしめ直して生活しています。皆様も、くれぐれも御注意ください。